

## 脱走兵は国家に背を向けている

この六月の十七日、元米軍兵士ジョン・フィリップ・ロウが日本にやってくる。

彼がパリに向け羽田空港から出国したのは一九七〇年暮れだから、三十年ぶりの日本だ。

フィリップ・ロウは、看護兵として横浜の岸根野戦病院に配属され、傷病兵の看護をする中でベトナムでの「汚い戦争」を知った。

一九六八年暮れに米軍を脱走したロウは、JATFC（反戦米脱走兵援助日本技術委員会）に助けを求めた。それから二年間の日本での生活の様子は、彼を家に匿った英文学者の氷川玲二と日高六郎が『となり脱走兵がいた時代』（思想の科学社刊）に書いている。

実はジョン・フィリップ・ロウという名前は偽名だ。

脱走中に彼は、軍隊内の非人間的生活を小説「われらが歓呼して仰いだ旗」に書いたが、一九七〇年に雑誌『すばる』に連載する際、登場人物の名前をそのままペンネームにした。

恩赦が下って母国アメリカに帰還し、医療関係の仕事に携わっている彼は、今なお、自分が脱走兵だったことを隠している。ベトナム戦争を「アジア解放戦争」だったなどと歴史を捏造する学者などいない国でも、脱走兵たちの多くは自らの過去を消して生きていく。

自由の国アメリカが、いまでも彼らの手紙を検閲している。

貧しいアジアの小国に、ナバーム弾と枯れ葉剤を降らせた兵隊たちが「当たり前人間」で、たった一人でも大義もない人殺しを拒んだ勇気ある者たちは「非国民」なのだ。

アルジェリア戦争、アフガン戦争、ベトナム戦争といった許し難い戦でも、人殺しをした兵士の方が、弱い者いじめを拒否した若者より圧倒的に多いのだから、脱走兵はいつもマイノリティーだ。

フィリップ・ロウが脱走した一九六八年、三つ年上のビル・クリントンはジョージタウン大学を卒業して、英国のオックスフォード大学に留学している。

ビル坊っちゃまはCO (Conscientious Objection) 良心的兵役拒否を申請して、ベトナムの戦場に行かなかったのにアメリカの大統領まで上りつめ、地方都市の下層階級やアフリカ系の青年たちはそんな抜け道も知らず、戦場で戦死するか、殺戮の記憶の中で今ももがいている……。

そのクリントン米大統領が昨年十一月、枯れ葉剤の後遺症の残るベトナムを訪問し、歓迎式典で「両国が共有する痛み」とあの戦争を表現した。ベトナム政府がカムラン湾を米軍基地に提供するという新聞記事を読んで、僕は脱走兵たちの芝居『お隣りの脱走兵』を書きはじめた。

あの戦争を阻止しようと闘い倒れた若者たちが忘れられようとしているが、劇場は鎮魂歌を歌うことのできる唯一の場所だから……。

近代に入って劇場は「情報の伝達」という機能をマスコミに譲った。しかし、テレビが権力の介入を怖れて報道を自主規制するとき、僕たちに残されているのは演劇というミニコミだからだ。

三十年前、米国と軍事同盟を結ぶこの国で脱走兵たちを匿った人々が、『お隣りの脱走兵』の上演に合わせて、フィリップ・ロウを日本に招待した。

脱走兵の存在は、インチキ民主主義者の化けの皮をはがすリトマス試験紙だ。

一九六八年十一月、CIAのスパイがジャテックに潜入し、根室港から船で脱出する直前に北海道警のパトカーに包囲され、脱走兵ジェラルド・メイヤーズが米軍警察に逮捕された。

『サンケイ新聞』は「ベ平連地下組織にメス・これが米兵の脱走ルート」「アジトに教授や外交官宅」と書き、『読売新聞』は「脱走米兵援助組織『ジャテック』の全容」「これがモスクワへのルート」と、戦中を思わせるような誹謗記事を掲載した。

『となりで脱走兵がいた時代』の聞き書きをした関谷滋は、この運動に携わったたくさんの人々をこう描写する。「LLサイズの服や靴を調達した人」、「医者を紹介した人」、「経営するラブ・ホテルの部屋を提供した人」、「ジャテックへのかかわりが明るみに出た人を職場などで支えた人」などの例を挙げ、最後に「そして、知ってて黙っていた人……」と書き記す。

先年公開された、ユダヤ人を収容所から救った人物を描いた映画「シンドラーのリスト」は日本で大評判だったし、リトアニアのユダヤ人に不法にビザを発給した杉原千畝さんを描いたテレビ・ドラマを茶の間で見るだけなら楽だ。

米国と軍事同盟を結んでいる国の国民が、米軍からの脱走兵を匿うことを非難するなら、日独防共協定を結んだ日本国政府の意向に背いてビザを発給したリトアニア大使を売国奴だと罵るべきだ。

一九七〇年、フィリップ・ロウをスウェーデンに送り出す方法を探りに、英仏語に堪能な一人の青年がヨーロッパに旅立っている。彼はフランスではアルジェリア戦争の脱走兵を匿った組織の人たち

や、ナチスの強制収容所で証明書の偽造をしていた老人に出会っている。

ヨーロッパでは、国家に敵対する脱走兵を市民が匿った歴史は古い。第二次世界大戦中のアメリカ兵の敵前脱走者だって四万人はいる。

日本は島国だから、この国から脱走するには飛行機か船しかない。国境線のある国で脱走すれば、簡単にスウェーデンやフランスに行けるのにと僕は思ったものだ。

しかし、多くの脱走兵が日本に亡命を求めたのは、この国に憲法第九条があるからだ。戦争を放棄した国家は、戦争を放棄した我々を受け入れてくれるはずだ！

しかし、日本政府はもちろん、ベトナム戦争反対を唱えていた革新政党も労働組合も、脱走兵を引き受けなかった。何故か？

脱走兵は自国だけでなく、国家そのものに背中を向けた存在だからだ。

一九六七年十月、米空母「イントレピッド」から脱走した四人の水兵を、ソ連政府は受け入れ、モスクワでテレビ出演させ、米帝国主義批判キャンペーンの役を担わせて各地を回らせた後、スウェーデンに入国させた。

しかし翌年、米空軍のパイロットか原子力潜水艦の乗組員以外は引き受けないと通告してきた。

その年の八月二十日、ワルシャワ条約軍五十万がチェコ・スロバキアに侵攻しているからだ。もし、ワルシャワ機構軍の中に、もう一つの「汚い戦争」からの脱走兵が出たらどうする？ 現に、この年、チェコ全土を制圧したワルシャワ機構軍からスウェーデンに脱走したソ連軍兵士が現れている。

たとえば、テロ集団が何万人を殺しても国家は安泰だ。しかし、戦場から脱走兵が出た事実を国家

は必死で隠そうとする。頑丈に作られたダムに小さな穴が開いたら、その穴に殺到する水が穴を広げ、あっという間に巨大なダムも崩れ去る。

だから、国家を空気のようになっている僕たちが、戦場に行くことを拒絶した時、国家はその姿を現し、社会は非国民のレッテルを貼る。祖国から脱出してみると、この地球上の陸地はすべていづれかの国家の領土で、逃げ場のないことに初めて気づく。

国家というものは、一人一人の人間を抑圧する暴力装置だとしたマルクス主義者も、指導部と組織を作り、運動を進めていく中で、組織を守ることが至上課題となっていく。

一九六九年七月。日本共産党は「ベ平連は反共暴力集団」との論文を発表した。

スウェーデンに脱出したアフリカ系の海兵隊員T・ホイットモアはその著書『兄弟よ俺はもう帰らない』にこう書いている。自分たちを通過させてくれたソ連には宣伝目的があり、受け入れてくれたスウェーデンにも利益があった。日本国は我々の仲間を米軍に引き渡した。「日本の人たちにお礼をいいたい。なぜなら、日本人は私を一人の人間として助けてくれたからである。ただの人間が、もう一人のただの人間を助けてくれたからである。そしてそこにはなんのヒモもつけられてはいなかった」(吉川勇一訳)。

あのころ、僕の回りにも自動車を持っている人は少なく、脱走兵の移動には苦勞した。若者たちの家には、電話がなく電報で連絡をとっていた。

どこの家にも自動車があり、若者たちは携帯電話を持っている今だったら、どんなにか楽だったろ

うと思う。しかし、今再び、在日米軍がどこかで戦争を始め、日本の基地から次々に米兵が逃げ出してきたら、今の日本の若者たちは脱走兵を匿うだろうか？

脱走兵たちの書き残したものの中に、三十年前の日本人が出てくる。

基地を出て野宿している米兵にコートを掛けてくれた人、食べ物に分けてくれた日本人、車に乗せた米兵が脱走兵だと知って自分の部屋に連れ帰って風呂に入れたタクシীর運転手、匿ってくれた娼婦たち……。そんな日本人たちはどこに消えたのだろうか？

政治が腐敗しようが、税金の無駄づかいが続こうが、デモ一つ起こすでもなく日がな一日メル友との情報交換で時を過ごし、ホームレスの老人を襲う若者たち……。

僕は、『お隣りの脱走兵』の時間を一九六八年から七一年に設定した。

この時期に、何かが終わり、何かが始まったような気がしてならないからだ。

一九六八年は、原子力空母エンタープライズの佐世保入港阻止闘争で年が明け、二月には民族解放戦線のテト攻勢と王子野戦病院反対闘争。三月にはソンミ村の虐殺が起こり、米兵の脱走が続いた。四月にはキング牧師暗殺。五月、チェコ・スロバキアでは二千語宣言、パリではカルチエラタンで学生たちが市街戦を演じた。六月には九州大学に米空軍の偵察機ファントムが墜落し、ロバート・ケネディが暗殺された。国内では、三里塚、東大、日大闘争。国際反戦デーの新宿は戦場だった。

ところが、翌六九年から、大衆の政治行動の潮が引いて行く。

大菩薩峠での赤軍派の逮捕（六九年）や、よど号ハイジャック（七〇年）。学生運動が過激化した

から、日本の反体制運動が大衆的基盤を失ったという人もいる。

が、それでは原因と結果が逆だ。戦争景気で潤うなか、大衆が戦争に抗議する学生たちを孤立させたのだ。

一九五〇年代の三種の神器（冷蔵庫、洗濯機、白黒テレビ）に代わって、ベトナム特需のなか、3C（カー、クーラー、カラーテレビ）が爆発的に売れた。

家電メーカー東芝のボナナスを奪った三億円事件が起こったのが、六八年暮れというのも象徴的だ。六九年に日本はGNP世界第二位に躍り出て、七〇年には土地成金が長者番付の上位に並ぶようになった。

四半世紀前、「鬼畜米英」の暗いナショナリズムを謳って焦土と化した日本が、経済的一等国になって自信を回復し、テレビは「明るいナショナル」を謳いはじめた。

日本人がエコノミック・アニマルに変貌した時代、個人による政治的犯罪が続発する。

六八年二月、在日韓国人金嬉老は、借金のもつれから暴力団員二人を射殺し人質を取って立てこもった。その十月、敗戦の年の五月に空襲で消失した皇居の新宮殿が落成した。数千億円といわれるベトナム特需があったればこそ、日本国はあの豪華な新宮殿を建てることができた。

翌年の一月二日、帰還兵奥崎謙三は、その皇居長和殿のバルコニーに現れた昭和天皇に向けてニュギニアで戦死した戦友に代わってパチンコ玉を撃ち、「ヤマザキ、天皇を撃て」と叫ぶ。

その年の四月、東北の寒村に育った永山則夫が連続ピストル射殺事件を起こして逮捕される。

十一月、佐藤・ニクソン会談によって沖縄返還が合意に達し、翌七〇年六月、日米安保がすんなり

延長された。七月、沖縄に進駐した日本軍と米軍にさんざんな目にあった富村順一が、東京タワーの展望台でアメリカ人宣教師に包丁を突きつけ、「日本人よ。沖縄のことに口を出すな。アメリカは沖縄から出ていけ」と叫んで逮捕された。

街路から我が家に戻った日本の大衆がコント55号の「裏番組をぶっ飛ばせ」に見入っている中、辺境に追いやられたマイノリティーの犯罪が過激化したのだ。

田中角栄の「日本列島改造論」が出た七二年には、戦後第二のベビー・ブームが来た。その一方で、日本中で公害問題が発生し、子供の引きこもり登校拒否が始まっている。

政治の季節の終焉は、何かの始まりでもあった。

CIAのスパイによって第一次ジャテックが崩壊したとき、GNP世界第一位と第二位の巨大な国家を相手に闘うには、厳格な規約を持つ秘密組織を作るべきだという意見も出た。

第二期ジャテックを立ち上げた人々は、人間が作る組織の危険性について考えた。

戦前の非合法組織がどのように壊滅したか。そして連合赤軍のリンチ事件。そこに共通するのは組織を守ることを最優先し、中央の指令に疑いを持つものを裏切り者とし、仲間をスパイだと疑うこと。自他に滅私を要求する組織は指導者を英雄視し、自分たちを無謬だと信じ、他の路線を進む者を「敵を利するから敵だ」と断罪し、やがて組織内部で粛清が始まる……。

指導部のいない、メンバーの名簿もなく規約もない、そのうえ金もないと言う「ナイナイずくし」の活動が始まった。この人から人へと口コミで増殖し拡大する開かれた組織は、「脱走兵通信」を売

ることで資金を作りつつ、脱走兵保護活動を公然のものとしていく。

活動以外の人生の楽しみを捨てたくない普通の人々が、戦争で殺されるのが怖い兵隊を匿うという活動が始まった。あの日々脱走兵を預かった人々は、僕を含め、小田実や鶴見俊輔の著書などろくに読んでもいない連中だった。

中央からの指令はなく、それぞれの町でそれぞれの闘いが始まった。

岩国では反戦喫茶「ホビット」が作られ、基地の滑走路でたこ揚げ大会を楽しんで空軍機のベトナムへの出撃を止めた。三沢基地の傍には反戦スナック「OWL」ができ、相模原では「ただの市民が戦車を止める会」が発足した。

最新鋭の兵器と訓練を受けた五十万の正規軍に対して、貧しいベトナム民族解放戦線のゲリラたちの工夫から、僕たちはたくさんことを学んだ。

その一方で、アメリカに「金儲けをすることは恥ずかしいことではない」ことを学び、唯心論から唯物論に転向した日本人は土地と株に狂奔し、自分の人生さえも浪費しだした。

それは僕の個人史でいえば、黒テントを作りトラックで全国を巡演していた時期だから、数人の脱走兵を数回預かることが精いっぱい、どうやって彼らを食べさせられたのか不思議でならない。

言い出した奴がやる、疲れたら休む、楽しくやる、人を責めない、市民生活を続けながらできることをやる。あのジャテックのスタイルは現在、各種のボランティア団体に受け継がれている。右も左も、いずれの政党もいまだ組織に頼っている中で、「勝手連」が成功しているのは、新しい形の政治参加の道筋を見つけたためだ。

七一年十二月十一日、僕は横須賀市民会館で、五百人の黒人兵たちに囲まれて、ジェーン・フォンダとドン・サザランドたちのF.T.A.ショーを楽しんでいた。

ベトナム戦争に反対することから始まったベ平連は、脱走兵を受け入れることで、「ヤンキー、ゴI、ホーム」から「G.I.、ジョイン、アス」へと成長した。

脱走兵を助けたのではなく、脱走兵に学んだのだ。

だが五年前、ホーチミン市の近くの解放戦線の掘ったトンネルに入ってみて、こんな狭く真っ暗な中に三十分でも自分は我慢できないと思った。そう。僕たちは三十年前、ベトナム人民と連帯なんかしていなかった……。

今回の公演では、脱走兵たちの三十年前を演じるために、アメリカから若い俳優を二人呼んだ。一九四九年生まれのフィリップ・ロウも、もう五十一歳。来日した彼に、現在の日本と、紀伊國屋ホール舞台の中の三十年前の日本人と脱走兵は、どう見えるだろうか。

(雑誌『世界』二〇〇一年七月号より転載)

## お隣りの脱走兵

2001年6月25日 第1刷発行

定 価 本体 1500 円 + 税

著 者 斎藤 憐

発行者 宮永捷

発行所 有限会社而立書房

東京都千代田区猿樂町2丁目4番2号

電話 03 (3291) 5589 / FAX 03 (3292) 8782

振替 00190-7-174567

印 刷 有限会社科学図書

製 本 大口製本印刷株式会社

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

© Ren Saito, 2001, Printed in Tokyo

ISBN 4-88059-279-X C0074

装幀・神田昇和 / カバーイラスト・花岡道子